

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23530734

研究課題名(和文) 抑圧を焦点とするクリティカル・ソーシャルワークの理論と実践

研究課題名(英文) The Theory and Practice of Critical Social Work Focusing on Oppression

研究代表者

田川 佳代子(沖田佳代子)(TAGAWA, Kayoko)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：10269095

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：市民をサービス利用者、消費者、顧客と捉え、市場としてサービスの供給を進め、経営管理主義の台頭があるなかで、ソーシャルワークにおける社会正義への責任や平等主義への志向は後退した。主流のソーシャルワークは、システムの変革よりも秩序の維持・適応を目標に据え、社会構造の歪から生じる諸問題を解消する観点は乏しい。

そうした脈絡において、次の観点からクリティカル・ソーシャルワークの構想を試みた。(1)抑圧の個人的経験を広範な政治的理解と関連づける構造分析、(2)抑圧や支配を除去し、搾取や社会的不正義を克服するのにふさわしい社会正義への志向、(3)批判理論、ポストモダニズム、ポスト構造主義の思考。

研究成果の概要(英文)：The principles of business management have risen to prominence, and the supply of services has become increasingly market-focused, treating citizens as service users, consumers and clients. Under such circumstances, responsibilities for social justice and equality in social work have declined. Mainstream social work has been more recently fixated on objectives like maintaining and conforming to the existing order rather than reforming the system, and it rarely adopts viewpoints that serve to reduce the various problems created by distorting the social structure.

This was the context under which the ideas of critical social work were tested from the three following perspectives: (1) a structural analysis that describes the broad political understanding of individual experiences of oppression; (2) the goal of achieving social justice that overcomes exploitation and removes dominance and oppression; and (3) the ideas of critical theory, post-modernism and post-structuralism.

研究分野：ソーシャルワーク

キーワード：クリティカル・ソーシャルワーク ソーシャルワーク理論 抑圧 社会正義 構造分析 ポストモダニズム ポスト構造主義 主体性の回復

1. 研究開始当初の背景

現代の多様な社会的諸問題に対するソーシャルワークの問題の捉え方、分析の視点、方法や対応は、人々のニーズに応え、結果や成果を創り出すという意味において、多くの検討すべき課題があると考えられる。

ソーシャルワークが社会的諸問題を適切に扱えていないと考える理由の1つとして、ソーシャルワークの知識、それを構成する理論的枠組みに問題や限界があると考えた。

これに一致する見解として、伝統的なソーシャルワークの覇権に挑むラディカル・ソーシャルワーク(Mullaly 1997)、クリティカル・アプローチの議論(Ife 1997)等がある。

Mullaly(1997)は、パラダイムの視座から、異なるイデオロギーを比較することにより、既存の社会にある支配的パラダイムを客観的に捉え返し、そこから望ましい社会の在り方、めざすべき社会のビジョンを問うた。彼は、現状を変えるために、批判的な認識視座をソーシャルワークに組み入れ、理論的再編をめざした(田川 2009)。

本研究の関心は、主流のソーシャルワークに換わるオルタナティブなソーシャルワークの理論的輪郭を描くことにある。主流のソーシャルワークでは周縁化されたラディカル・ソーシャルワークの遺産を、正当に扱われるように位置づけるものである。

2. 研究の目的

本研究の全体構想は、ポスト福祉国家の時代の社会的諸問題に応えるソーシャルワークとはどのようなものであるかを探求し、ソーシャルワーク理論の再構築をめざすものである。研究課題は、次の具体的な研究目的の達成によって実現を図ろうと試みた。

- (1) 福祉国家/福祉資本主義の社会システムにおける伝統的ソーシャルワーク理論と実践の批判的分析について調べる。
- (2) 抑圧の構造について調べる。抑圧は社会正義の問題として、また社会問題の基本的源泉として焦点をあてる。
- (3) クリティカル・ソーシャルワークの理論的枠組みを構成する諸要素について調べる。批判理論、ポストモダニズム、ポスト構造主義等を要素とする概念的枠組みを検討する。
- (4) 抑圧を焦点とする実践を調べる。

これまでソーシャルワークは福祉国家の形成過程において発展してきた。しかし、グローバル資本主義経済は、福祉国家の普遍性、完全雇用や平等といった特徴とは合わない(Leonard, P. 1997:113)。グローバル化の福祉に及ぶ影響には、税制度の見直しや賃金抑制、公的支出の削減、サービス供給における民営化や市場の役割強化等が並ぶ。こうした実践の脈絡・背景を組み入れたソーシャルワーク理論の再編が課題となる。

3. 研究の方法

本研究は、既存の社会システムを対象化する認識的視座を検討するところから始めた。オルタナティブな実践を実現するためには、既存のシステムを俯瞰することのできる認識的視座を必要とする。研究の認識的視座は、ソーシャルワークの理論的枠組みやその構成要素にも関連するものである。

ソーシャルワークのアイデンティティは社会福祉制度との結びつきにおいて形成され、制度政策論との乖離はソーシャルワークの本質を危ういものにする(Gilbert 1977)。

ソーシャルワーク教育は、制度政策論と方法機能論に二分されてきた。マクロとミクロの分裂は、研究や実践において不必要な限定を強いる。とりわけ社会正義を探求し、臨床的な脈絡に潜む権力や抑圧の問題を適切に取り扱うには、ソーシャルワークの二又に分けられた構造を統合することが課題となる(Vodde and Gallant 2002)。

ソーシャルワークのアプローチを体系化した先行研究として、Carniol(1984)、Whittington and Holland(1985)、Howe(1987)、Lundy(2004:54-5)について調べた。それらの研究は、Burrell and Morgan(1979)の枠組みを用いてソーシャルワークのアプローチを体系化した(田川 2011)。

Burrell and Morgan(1979)は、社会理論を4つのキー・パラダイムの観点から理解することを示した(Burrell and Morgan = 1986)。社会に関する2つの理論、すなわち「秩序」

「葛藤」の議論を、「レギュレーションの社会学」と「ラディカル・チェンジの社会学」の観念に置き換え、社会理論として提示した。

Lundy(2004:54-59)は、Carniol(1984)の「イデオロギー的次元およびイデオロギー的視座」とWhittington and Holland(1985)の「ソーシャルワークのパラダイム」を重ね合わせ、ソーシャルワークのアプローチを4象限の図で表した。「主観」「客観」の次元(または「個人」-「構造」)の次元と、「レギュレーション」「ラディカル・チェンジ」(または「秩序」-「葛藤」/「適応」-「転換」)の次元を組み合わせた。

この観点から、Lundy(2004: 54-5)は、構造的アプローチを社会的諸問題に取り組むにあたってもっとも有望なものとして位置づけた。それは個別的諸問題を社会経済的状況や構造的脈絡に位置づけて理解することである。人々の抱える諸問題の社会的・政治的・経済的脈絡の分析的理解を欠くことは、ソーシャルワーカーの視点を個人的な欠点に傾かせ、それは医療的処置や監視、収容という社会統制に導く要因となり、進歩主義的な社会変革や社会正義が顧みられなくなると批判した(Lundy 2004:12)。

これに対しIfe(1997)の枠組みは、モダニズムに対する批判を克服するため、ポストモダニズムやポスト構造主義の視点から、ディスコース分析を示した。

Ife(1997)は、競合するヒューマン・サービスのディスコースを「経営管理」、「市場」、「専門職」、「コミュニティ」の4象限で表した。「権力」の諸次元を「階層制」と「無政府状態」として垂直線の上・下に位置づけ、「知識」の諸次元を「実証主義」と「人道主義」として水平線の左・右に位置づけた。権力の所在を国家に位置づけるのではなく、あらゆる場所、刑務所・学校・施設・病院・福祉事務所など社会的状況に見出せるものと捉えた。普遍主義や歴史的連続性、連帯というものを強調するモダニズムに対し、差異やローカルな現実や断片化を強調するポストモダニズム、現実の多元性・多様性を反映する枠組みを示した。

ランディとアイフェの認識的視座を併存させつつ、本研究を進めた。

4. 研究成果

(1)主流のソーシャルワークに対する批判

Germain(1973)による生態学的メタフォーが導入されて以来、エコロジカル・システム視座が、個人・家族・集団・地域レベルの実践で採用され(Germain and Gitterman 1995)、今日のソーシャルワークの主流を占めている。生態学的見地からの実践は、適応的な能力を高め、人の環境、人と環境の交互作用を高めることに志向する(Germain 1979:8)。

このアプローチは、社会的環境という中立的な概念に依拠し、異なる集団間の目標や利害の葛藤や権力関係については注目しない。システムの改革よりも秩序の維持を強調し、適応が実践の目標とされる。構造的アプローチの支持者からは、このような特性と方向性をもつシステム・モデルへの批判がなされる(Finn and Jacobson 2003; Mullaly 1997:124)。

主流のソーシャルワークは、クライアントや抑圧された共同体、社会正義の問題というよりも、むしろ専門職主義、職業経歴の上昇、職場の権限に同一化する。個人の欠点、病理、不適当を強調し、社会的諸問題を非政治化するやり方で捉える傾向がある。介入方法は、権力や構造、社会関係、文化、経済の分析に異議を述べる意図はなく、あくまで個人に照準がある(Baines 2007:4)。

(2)社会正義の問題としての抑圧

抑圧は、個人間にせよ、社会集団や階級間にせよ、地球規模の全体社会にせよ、経済的・社会的・心理的な支配と搾取を含む人間関係の様態である(Gil 1998:10)。

ソーシャルワークの鍵となる価値、社会正義は、差別や抑圧、制度的不平等に立ち向かうための擁護を内包する(Barker 2003:404-5)。政治哲学者アイリス・マリオン・ヤングは、正義論を財の公正な配分に限定するロールズの議論を批判し、正義を制度化された支配と抑圧の除去として構想した(Young 1990:15)。

ギルによれば、ソーシャルワークと社会サ

ービスの主要な機能は、歴史を通じ社会の中の抑圧や不正義の程度を修正、微調整し、人間発達に及ぼす破壊的な結果を改良することであった。だが、それによって、不平等、抑圧、不正義、その結果が取り除かれてきたわけではなかった(Gil 1998:14-15)。

抑圧されている集団は、能力を伸ばし完全に社会に参加することが阻まれる障壁を経験する。ヤングは、抑圧の5つの顔として、搾取、周辺化、無力なこと、文化的帝国主義、暴力を示した(Young 1990:42)。

これらは行動、地位関係、分配、文脈、その他の文化的、人為構造物のアセスメントに用いられる。抑圧の顔は、1つの集団の抑圧の訴えを評価する手段となり、操作、観察、比較可能なものにする。人種差別、性差別、階級、同性愛、年齢差別など、抑圧されている集団を別々の体系として説明すれば、異なる集団間の類似と相違を単一の尺度によって排除したり、還元する問題が生ずる。抑圧の5つの顔はそうした問題を回避することができる(Young 1990:63-4)。

(3)クリティカル・ソーシャルワークとは何か?

クリティカル・ソーシャルワークは、主としてカナダやオーストラリア、そしてイギリスを中心にして議論がされてきた。伝統的ソーシャルワークは、統一的、体系的モデルの探求に努力をしてきたが、クリティカル・ソーシャルワークは統一した概念をもたない。「クリティカル」視座は、構造的、ラディカル、進歩的、反抑圧的など、それぞれの名称で呼ばれる(Hick and Pozzuto 2005:)。

Cambell and Baikie(2012:78)によれば、クリティカル・ソーシャルワークを現実的に「適用する」一連の理論と捉えるのではなく、ソーシャルワークに批判的視座を与える包括的信念体系として捉える。

批判理論は、統合された理論的視座を意味するのではなく、多様な異なる理論的立場を包含するものである(Briskman, Pease and Allan 2009:4)。このことは抑圧の一形態に傾注するのではなく、多様な抑圧の形態と同盟し連帯することを意味する。クリティカル・ソーシャルワークは、多様な視座の交差点で行われる実践として描くことができる。

クリティカル・ソーシャルワークの核となるミッションは、実践と政策策定における社会正義を高めることである(Healy 2005)。

Healy(2005:219-220)は、クリティカル・ソーシャルワークを次の志向性を共有する広範なアプローチとして理解する。

構造的な社会過程、特に、階級、ジェンダー、障害、セクシュアリティに関連して社会サービスを利用する人々に経験される社会的抑圧に寄与する。

ソーシャルワーク実践と政策の過程における反駁する結果についての批判的自己省察の見解をもつ。

政策策定、直接サービスの分配、ソーシャルワーク教育における権威主義的な関係より共同参加に尽力する。

進歩的社会変革に向けて、抑圧されている人々と共に、彼ら自身のために働くことに携わる。

(4)クリティカル・ソーシャルワークの理論的構成要素

Hick and Pozzuto (2005:)によれば、クリティカル・ソーシャルワークの理論的視座は、構造的諸理論、フェミニストの諸理論、現象学、社会構成主義、ポストモダニズム、ポスト構造主義、ポスト植民地主義などを包含する。ここでは批判理論、ポストモダニズム、ポスト構造主義を調べた。

批判理論

クリティカル・ソーシャルワークは、「もはや厳密に批判理論と緊密な関係にはない」(Hick and Pozzuto(2005: xi)といわれるが、批判理論はクリティカル・ソーシャルワーク実践の基礎をなし(Briskman, Pease and Allan 2009:4)、主流のソーシャルワークとの違いを示す理論的根拠を与える。

クリティカル・ソーシャルワークの「クリティカル」の用語は、批判理論から借用している。批判理論はドイツの社会思想家「フランクフルト学派」から進化した社会学や哲学の理論である。「フランクフルト学派」は西洋マルクス主義学派であり、マルクーゼ、ハバースマス、アドルノ、フロム、ホルクハイマーらに拠る(Hick and Pozzuto 2005: xi ; Briskman, Pease and Allan 2009: 4; Alway 1995:2)。

近代マルクス主義は、人々の意識に対する支配的イデオロギーの影響を省みなかった点が批判された。これに対し批判理論は、主体性(subjectivity)の理解とマルクス主義の要素を統合しようとした。特に、人々のagencyの重要性、すなわち、社会変革の過程に積極的に参与する人々の能力について評価し直した(Alway 1995:2)。

Leonard, Stephen(1990:3)によると、「社会に関する批判理論は実践的意図をもつ理論」と定義される。理論の実践的意図とは世界を変える志向性であり、解放のビジョンを表す(Alway 1995:2)。解放のビジョンは、行為者agentsと行動actionsに関心がある。

批判理論では、社会的学問は社会変革の役割を果たし、社会的底辺にいる人々のエンパワーと解放、世界の変革に携わる(Leonard, S. 1990: xiii)と考える。

ポストモダニズム

批判理論には、モダニストとポストモダニストによる競合する2つの視座がある。

ポストモダニストの中心的主題の1つは、唯一の合理性、ディスコース、ナラティブを否定することである(Ife 1997:85)。

普遍的な主張への懐疑があり、確かさや絶対

的真實の追求よりも、対話への関心が高く、自己批判と多様性への配慮に注意が向けられる(Leonard, P. 1995:17)。

他方で、多元的現實を認めることから、ポストモダニストは、社会正義に通じる抑圧の概念から注意をそむけ、一貫した政治的施策を欠くと批判される(Rossiter 1996:29)。

Mullaly(1997)は、批判理論における2つの視座 - モダニストとポストモダニストを完全に二分あるいは両極化したものとはみなさず、各々をもう一方がもたない強さや限界をもつものとみる。そして、各々の強さをもう一方の限界や反駁を修正するものとして捉える(Mullaly 1997:115)。

ポスト構造主義

単純な構造分析や決定論は、人々の力を潜在的に削ぎ落とす危うさを持つ。省察的な実践の立場からは、構造的アプローチに対し、世界を説明し意味を付与する人間の主体的・能動的な働きやかかわり・活動を見落していると批判される(Pease and Fook 1999; Sewell 1992; Schon 1983)。

批判理論、ポストモダニズム、ポスト構造主義の思考から実践を再概念化するときに、主体の回復は主要なテーマである(Giddens=1989:88-9)。

現代世界の複雑さや反駁、不確かさは、単純な二元論、権力を持つ者とそうでない者、利益を受ける者とそうでない者、抑圧する者と抑圧される者、搾取する者と搾取される者のように、相互に排他的な区分で捉えきれものではない。批判的省察からポストモダニズムやポスト構造主義への接近がある(Pease and Fook 1999)。

ただポスト構造主義への批判は、解放の企てにもかかわらず、政治的施策を欠く点、そして現実の説明を真實とも普遍とも捉えない相対主義に向けられる。

(5)抑圧を焦点とするクリティカル・ソーシャルワーク

抑圧を焦点とするクリティカル・ソーシャルワークの実践には、主体性の回復を伴う。ジンガロ(Zingaro=2008)の「真實を語る代償」「生き延びた人の主体性」「境界で生きる」の考察は、抑圧を焦点とした実践にある困難さを具体的に示している。

抑圧された人の声が聴かれる時、聴かれた声はどのように取り扱われるのか。抑圧の経験が話された後、話した人にのしかかる負荷はどう回避することができるのか。語られた後に抑圧が高まるのが予期されるならば、真實はどう伝えられるのか。話した後の孤独や孤立の危険を回避するため、沈黙が選ばれるならば、真實にどうアプローチすることができるのか。語られた抑圧の経験が、事例の1つとして、他の事例とともに陳列され、既存の社会秩序に埋め込まれるにすぎないならば、語る者は何のために語るのか。

語る行為が、語る主体の回復に根差し、社

会正義に志向したものでなければ、抑圧は社会のなかで沈潜する他ない。抑圧の解放を企てる実践には主体性を取り扱う考慮(知識、価値、技術)がいる。主体性には、社会から規定されてくる従属性と、それを規定し返そうとする能動性の2つの側面がある。抑圧を焦点とするクリティカル・ソーシャルワークは、社会に対して自己のアイデンティティの承認を求める行為を心理社会的に支援する実践でもある。

<文献>

- Alway, J. (1995) *Critical Theory and Political Possibilities: Conceptions of Emancipatory Politics in the Works of Horkheimer, Adorno, Marcuse, and Habermas*, Greenwood Press.
- Baines, D., eds. (2007) *Doing Anti-Oppressive Practice: Building Transformative Politicized Social Work*, Fernwood Publishing.
- Barker, R. (2003) *The Social Work Dictionary(5thed.)*, Washington, DC: NASW Press.
- Briskman, L., Pease, B. and Allan, J. (2009) 'Introducing critical theories for social work in a neo-liberal context', in *Critical social work, theories and practice for a socially just world*, second edition, eds Allan, Briskman, and Pease, Allen & Unwin, 3-14.
- Burrell, G. and Morgan, G. (1979) *Sociological Paradigms and Organisational Analysis*. London: Heinemann Educational Books. (=1986、鎌田伸一・金井一頼・野中郁次郎訳『組織理論のパラダイム - 機能主義の分析枠組み』千倉書房)
- Cambell, C. and Baikie, G. (2012) 'Beginning at the Beginning: An exploration of Critical Social Work', *Critical Social Work*, 13(1) 67-81 (<http://www.uwindsor.ca/criticalsocialwork/>)
- Carniol, B. (1984) Clash of Ideologies in Social Work Education, *Canadian Social Work Review*, 184-199.
- Finn, J. L. and Jacobson, M. (2003) Just Practice: Steps toward a New Social Work Paradigm, *Journal of Social Work Education*, Vol.39, No.1, 57-78.
- Germain, C. B. (1973) An Ecological Perspective in Casework Practice, *Social Casework*, 54,323-330.
- Germain, C. B. (1979) Introduction: Ecology and Social Work, Germain, C. D. edited, *Social Work Practice: People and Environments*, Columbia University Press.
- Germain, C. B. and Gitterman, A. (1995) Ecological Perspective, 19th *Encyclopedia of Social Work*, NASW Press, 816-824.
- Giddnes, A. (1979) *Central Problems in Social Theory*. (=1989 友枝敏雄, 今田高俊, 森重雄訳『社会理論の最前線』ハーベスト社)
- Gil, D. G. (1998) *Confronting Injustice and Oppression: Concepts and Strategies for Social Workers*, Columbia University Press.
- Gilbert, N. (1977) The search for professional identity, *Social Work*, 22,5, 401-406.
- Healy, K. (2005) *Social Work Theories in Context: Creating Frameworks for Practice*, Palgrave.
- Healy, K. (2005) 'Under reconstruction: renewing critical social work practices' in *Social Work: A critical turn*, eds Hick, Fook and Pozzuto, Thompson, 219-230.
- Hick, S., and Pozzuto, R. (2005) 'Introduction Towards "Becoming" a Critical Social Worker', in *Social Work: A critical turn*, eds Hick, Fook and Pozzuto, Thompson,
- Howe, D. (1987) *An Introduction to Social Work Theory*, Wildwood House.
- Ife, J. (1997) *Rethinking Social Work: Towards critical practice*, Longman.
- Leonard, P. (1995) Postmodernism, Socialism and Social Welfare, *Journal of Progressive Human Services*, Vol.6 (2) 3-19.
- Leonard, P. (1997) *Postmodern Welfare: Reconstructing an Emancipatory Project*, Sage Publications.
- Leonard, S. (1990) *Critical Theory in Political Practice*, Princeton University Press.
- Lundy, C. (2004) *Social Work and Social Justice*, broadview.
- Mullaly, B. (1997) *Structural Social Work: Ideology, Theory and Practice*, 2nd ed., Oxford University Press.
- Pease, B. and Fook, J. (1999) Postmodern critical theory and emancipator social work practice, Pease and Fook edited, *Transforming Social Work Practice*, Routeledge.1-22.
- Rossiter, A. B. (1996) A Perspective on Critical Social Work, *Journal of Progressive Human Services*, Vol.7(2) 23-41.
- Schon, D. A. (1983) *The Reflective Practitioner*, Basic Books. (=2007,2009 柳沢昌一・三輪建二『省察の実践とは何か』鳳書房)

- Sewell, W. H. (1992) A Theory of Structure: Duality, Agency, and Transformation, *American Journal of Sociology*, 1-29.
- 田川佳代子(2009)「イデオロギー分析とソーシャルワーク理論の再編」『社会福祉学』第49(4号)3-13.
- 田川佳代子(2011)「ソーシャルワーク理論とイデオロギーの枠組み - ミクロとマクロの二又構造を橋渡しするアプローチ - 」『社会福祉研究』第13巻25-35.
- Vodde, R. and Gallant, J. P. (2002) Bridging the Gap between Micro and Macro Practice: Large Scale Change and a Unified Model of Narrative-Deconstructive Practice, *Journal of Social Work Education*, Vol. 38. No.3 (Fall) 439-458.
- Whittington, C. and Holland, R. (1985) A Framework for Theory in Social Work, *Issues in Social Work Education*, Vol.5. No.1. Summer, 25-50.
- Young, I. M. (1990) *Justice and the Politics of Difference*, Princeton University Press.
- Zingaro, L. (2007) Rhetorical Identities: Contexts and Consequences of Self-Disclosure for 'Bordered Empowerment Practitioners. (=2008 鈴木文・麻鳥澄江訳『援助者の思想 - 境界の地に生き、権威に対抗する - 』お茶の水書房

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

田川佳代子「社会正義とソーシャルワーク倫理に関する一考察」日本社会福祉学会『社会福祉学』Vol.56-2(No.114) 1-12
2015年 査読有

田川佳代子「クリティカル・ソーシャルワーク実践の理論素描」愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科『社会福祉研究』第15号 13-20 2013年 査読無

田川佳代子「ソーシャルワーク再考 クリティカル理論、ポストモダニズム、ポスト構造主義」愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科『社会福祉研究』第14号 1-10
2012年 査読無

[学会発表](計1件)

田川佳代子「抑圧を焦点としたクリティカル・ソーシャルワーク 「境界」から問いなおす」日本社会福祉学会 第64回秋季大会 佛教大学紫野キャンパス(京都市北区) 2016年9月10、11日

6. 研究組織

(1)研究代表者

田川 佳代子 (TAGAWA, Kayoko)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号: 10269095